

現代アイルランド劇作家研究(1): シェイマス・フィネガンの世界

—宗教紛争・イデオロギー対立・エグザイルをこえて

河野賢司

(1999年6月1日受理)

1 はじめに

シェイマス・フィネガン (Seamus Finnegan, 1949-) はベルファースト生れのカトリックの劇作家である。残念ながら各種のアイルランド文学辞典¹⁾にこの作家の名前が見出せないのは、イギリスを作家活動の場としていることが大きな要因と思われるが、その作品はアイルランド問題に密接に関わり、すでに4冊の戯曲集を発表していることから判断して、見過ごせない劇作家の一人である。いま記したように詳細な経歴は分からないものの、ロンドンの Jewish Free School で4年間英語を教えた経験があり、舞台のほかテレビ、ラジオ、映画などにも幅広く執筆し、演劇作品はロンドン、イスラエル、アメリカで上演されたという。現在は、ロンドンにあるスパイロ・ユダヤ歴史文化研究所 (the Spiro Institute of Jewish History and Culture) の非常勤講師をつとめ、イスラエル人劇作家ミリアム・ケイニー (Miriam Kainy) と新作を共同執筆中とテキストには記されている。さて、現時点で入手できる4冊のテキストに収められた12の戯曲を初演の年代順に並べたのが、以下に示す表である。

順	戯曲タイトル	初演時期	初演場所
①	<i>Act of Union</i>	1980. 11	Soho Poly Theatre Club, London
②	<i>Soldiers</i>	1981. 10	Old Red Lion Theatre Club, London
③	<i>James Joyce and the Israelites</i>	1982	Lyric Studio Theatre in Hammersmith, London
④	<i>North</i>	1984. 3	Cockpit Theatre, London
⑤	<i>Mary's Men</i>	1984. 6	Drill Hall Theatre
⑥	<i>The Spanish Play</i>	1986	Place Theatre, London
⑦	<i>The German Connection</i>	1986. 11	Young Vic Theatre, London
⑧	<i>The Murphy Girls</i>	1988. 6	Drill Hall Arts Centre, London
⑨	<i>Mary Maginn</i>	1990	Drill Hall Arts Centre, London
⑩	<i>Wild Grass</i>	n.d.	(Commissioned and accepted by the BBC for radio 4's <i>The Monday Play</i>)
⑪	<i>It's All Blarney</i>	n.d.	[no performance record given]
⑫	<i>Comrade Brennan</i>	n.d. [1993]	(commissioned by 7.84 Theatre Company of Scotland)

上記から分かるように、1980年以降着実なペースで執筆を続け、舞台上で公演されたものはいずれもロンドンの劇場²⁾、とくに初期は小劇場——例えば①のSoho Poly Theatre Clubは僅かに45席、②のOld Red Lion Theatre Clubは60-80席、③Lyric Studio Theatreでも130席であり、パブの階上に設けられ、前衛劇で知られるBush Theatreでも公称90席であることを思えば、その狭さがわかる——、中期作品でも⑤Drill Hall Theatreの280席、⑦Young Vic Theatreの456席と、千席を越える商業劇場が珍しくないロンドンでは、比較的小規模な劇場で初演されている。4つの戯曲集は、題材と主題の面で顕著な特色をもつ。第1戯曲集『北』は、北アイルランド紛争に直接的に触発されて書かれた政治色の濃い4作品(①②④⑤)を収めている。第2戯曲集『ヨーロッパの墓場』の3作品(⑥⑦⑧)では、舞台は北アイルランドとヨーロッパ大陸の両者にまたがる。第3戯曲集『まったくのたわごと』では、外部のエグザイルの立場から北アイルランドやアイルランドを眺める4作品(⑨⑩⑪⑫)が収録されている。刊行年では第4戯曲集にあたる『ジェイムズ・ジョイスとユダヤ人』はやや異色で、同名の標題作③(初演1982年は、第1戯曲集作品初演の時期に相当)と『エグザイルの対話』の2作を含むが、後者はユダヤ人現代作家6人の戯曲の一部抜粋と、1993年1月10日から23日までの2週間のフィネガンの旅行日誌とを並行収録したもので、いわば〈ユダヤ演劇アンソロジーおよび随想録〉といった形式の作品である。のちに見るように、ユダヤ人問題への関心は、ユダヤ人登場人物を配した第2戯曲集あたりから既に始まっており、フィネガン演劇の理解には欠かせない重要な要素であるのだが、彼自身の独立した単著の芝居ではないので『エグザイルの対話』は本稿の議論から除外し、また紙幅の制約から『ジェイムズ・ジョイスとユダヤ人』も残念ながら割愛して、以下にオリジナル戯曲11編の概要を刊行順に紹介し、フィネガンの演劇のほぼ全貌を明らかにしたい。

2 フィネガン演劇の世界

(1) 第1戯曲集『北』

①『連合法』(Act of Union) 1幕全13場

爆発音、銃声、サイレンで幕があく。ベルファースト出身で労働者階級の中年婦人メイズィ(Maisie)が観客に向かって長いお喋り。この街の日常生活の不便さ、例えば友人のロウズィ(Mrs Rosie Murray)が白タク(people's taxi)——テロで運休しがちでヨーロッパ一高運賃と悪評のアルスター・バスよりはまし——に乗って美容院に行く途中、2度も停車させられ車外で買い物袋から化粧パフまで点検を受け、検問所のボディ・チェック(body search)では、せっかくアフロ・ヘアーにパーマした髪を爆発物

(incendiaries)がないか、婦警からいじくりまわされる始末(1場)。埠頭の薄汚れたパブ。60歳くらいの主人パディ (Paddy Mulligan) はカトリックだが、店の内装は英国旗、女王の肖像画、戦勝記念行進の写真など、まるでロイヤリスト・パブそのもの。境界のパブの9割はカトリック経営、パブと私設馬券屋 (bookie) は、カトリックの二大専売特許である。しかしこのパブも市環境課の再開発計画でまもなく取り壊される運命にあり、階上でバンド練習しているプロテスタントも行き場をなくすだろう。深夜1時を過ぎて、アルスター警察 (RUC) 公安部の3人の刑事——シドニー (Sydney, 50代)、ショーン (Sean Fitzgerald, 20代半ば)、スタン (Stan, 約40歳) が来店。プロテスタントなのにアイリッシュ・ウィスキー (Bushmills) を注文するスタン、シドニーとショーンは辛辣に揶揄する(2場)。弁護士ボイル (Raymond Boyle) が、逮捕連行された12歳の少年ケヴィン (Kevin Flannagan) の安否をハリウッド兵舎 (Hollywood Barracks) に電話で照会するが、該当者なしの虚偽の返事(以下、このやりとりはすべてテープで流れる)。毛布以外は全裸で寝ていた囚人(これがケヴィン少年か?) に、覆面男 (ショーン刑事) が、頭巾を被せたうえで蹴り転がし、拳銃を首筋に押し当て、果ては股間を蹴るなどの暴行を働く。最初と最後に隠蔽音 (white noise) が響き、台詞は一切なしの無言劇。儀式のように無情に効率的に演じられる(3場)。救急医療棟の長期夜勤看護婦、駐屯地の夜警兵士、〈カトリック狩り〉を企むプロテスタントの偽タクシー運転手、パブで深夜まで飲んでいたカトリック、この4人が、深夜1時のベルファーストでそれぞれの心境を順番に語る。看護婦は退屈の余り事故発生を期待し、夜に眠るのはプロテスタントもカトリックも同じこと、と兵士は感慨に耽り、カトリック乗客は、罾だと察知して車から脱走、川へと飛び込む(4場)。ワイン中毒のヤップ (Yap, 約60歳: 普通名詞'yap'は「無骨者、うすのろ」の意) が、ユニオニスト系の『ベルファースト・テレグラフ』紙を街角で売り歩いている。アル中仲間のバクシー (Bucksey, ヤップより少し年下) が酒を勧めると、彼が爆死したとの報に接していたヤップは仰天、やがて騙されたと悔しがる。しかし、実際、新聞の一面トップに「バクシー爆死」の記事が踊っていた…(5場)。再び弁護士が問い合わせるが、受話器を切られる。3場に戻り、看守が手つかずの食事を取り替えるが、囚人は茫然自失、虚空を凝視(6場)。2場のパディのパブ。ショーン刑事はカトリック (a Taig) で、宗教と政治は別物、当局には俺みたいに「墮落したカトリック」 (renegade Fenians) が大勢おり、日曜ミサや告解を欠かさぬ敬虔なカトリック信者なら、スラム街よりアルスター警察の方が多い、と答える。彼が息子のジム (Jim) と同窓だったと聞いて、パディはやや不安顔。そこへスタンが現れ、同僚シドニーがジープから降り際に一発で射殺されたことを知らせ、IRAへの報復を誓う(7場)。1場のメイズィの長広舌。5人の子育ても一段落、

新婚旅行の地ダブリンへ久々に来てみると、やれ暫定固定相場通貨 (green pound) だの E.E.C. だのと、お金の噂ばかり。84ペンスと割高なギネスは冷え過ぎで、飲ん兵衛の夫が初めて飲み残すほどまずく、近所の子どもへの御土産に棒キャンディを買おうと値段を尋ねると、北アイルランド訛からプロテスタントと早合点した女店員が、不躰な客あしらいを見せたのに激怒、プロテスタントがアイルランド統一を恐れるのも無理はない、ダブリンは金にあくせくする偽善者の街だと嘆じる(8場)。ヤップがバクシーに、死後、天国に入る門での入国申請者の行列について尋ねる。聖ペテロから貰った書式には、生年月日、旧姓、職歴、病歴、前科のほか、死に至った事情とその責任者の記入欄があり、外国船から荷崩れした果物を拾って失敬している矢先に自動車爆弾で吹っ飛ばされたこと、おそらくは UDA ないし他のロイヤリスト過激派集団、もしくは SAS、ことによると IRA の誤爆かも、と正直に答えた。すると聖ペテロは気取ったイギリス英語で、天国入国志願者多数につき、一部補助申請用のピンク色用紙をよこしたので、バクシーは怒って退去、悪魔のもとへ駆け付けると、無署名でも地獄へ入れて貰えたさ、と嘯く(9場)。弁護士の再度の電話に、罵声が応答。6場の続き。床に寝そべった囚人は、崖の上の灯台から海の青波や緑波が見える、とうわ言を繰り返し、入室したショーン刑事にとびかかる(10場)。パディの酒場。最近ずっとスタンは泥酔し不機嫌。遅れてきたショーンをピストルで威嚇するうち、ついに引き金を引く。血糊のついたショーンとシドニー。「何が起きてるかはおろか、ベルファーストがどこにあるのかもみんな知らなかった、いまでは少しはよく分かっているが、それでも誰も気かけやしない」とパディ(11場)。4場と同じ4人。午前8時。逃走したカトリックは2発の弾を浴びたものの一命はとりとめた(12場)。8場のメイズィの続き。イギリス人に対する敵意にかけては、ペイズリー (Ian Paisley, 1926-) もカトリックも同類、危険視されるこの街も馴染めば体の一部であり、この〈土地〉をめぐってこれからも自分は闘い続けると、メイズィは断言。最後にバクシーが、シドニーが死んだとき、休暇中のペテロに代わって悪魔が門番をしていて、誰でもかれでも天国へ入れてやったとき、と語る(13場)。

標題にとられた「連合法」は、英国史においてイングランドがウェールズ(1536)、スコットランド(1707)、そして大ブリテンがアイルランド(1800)と連合した際の、それぞれの法律を指す言葉だが、同時に〈結合の営み〉³⁾を暗示することもある。だが、作品中ではこの史実関連の政治や法律も、あるいは性的な主題も論じられず、「連合法」にまで遡及する北アイルランド問題の根の深さを象徴的に暗示しているようだ。メイズィに代表される「北」のカトリックのプロテスタント擁護の姿勢は含蓄があるし、亡霊の語る冒瀆的な死後世界も諧謔的である。

②『兵士たち』(Soldiers) 1幕全19場

ミサの序に続いて、イギリス人ジャーナリスト、マリリン(Marilyn)が1969年8月15日午後5時、治安維持のため初めて英軍兵士が導入された当日の暴動事件のレポート筆記を読み上げて報告(1場)。投入された英軍の目的はカトリック保護、と司祭(2場)。1972年1月の血の日曜日事件抗議のデモから戻ったキアラン(Ciaran)とケヴィン(Kevin)。デモの興奮は麻薬やセックスと同じ解放感だ、とケヴィン。一方キアランは醒めた口調で、アイルランドのリンチ首相(John Lynch)の1969年の宣伝行為、アデンやキプロスでの英軍の行為、つまり一線を超えるや武力鎮圧に転じる狡猾な姿勢を指摘。司祭が、暴力デモの参加者たちは共産主義者だと批判(3場)。ロンドンのアマチュア・サッカー・クラブの更衣室で、十代後半のロバート(Robert)とビリー(Billy)の会話。手っ取り早く金になり、旅行もでき知らない人や土地に巡り会えるので軍隊入隊を決めたロバートと、規律嫌いで失業手当で御の字、とビリー。司祭がロバートにライフル銃とベレー帽を授ける(4場)。先の『連合法』でも御馴染みの、ベルファーストのワイン中毒のバクシー(Bucksey)とヤップ(Yap)が地獄で密造ウィスキーを飲んでいる。天国には聖餐用赤ワイン(altar wine)しか酒がないが、この密造酒はケッシュ牢獄の服役囚からイギリス当局が没収したのをさらに悪魔が盗んだ代物で、悪魔はイギリス野郎(Sassenach)よりアイルランドの方が気に入っている、などとお喋り(5場)。マリリンが録音機に収録。1974年春のある日、17歳の少年が英兵に誤射され死亡。血痕の残る現場には、牛乳瓶に野花在差され、燭台やマリア像の即席の祭壇。三色旗に覆われた少年の棺をIRAが運ぶ。司祭が教会から彼らを追い払う(6場)。暗転のなか、キアランが裸で椅子に座り、活動家か否か、男から厳しい尋問を受けている(7場)。駐留英軍は「法と秩序」の軍ではなく、英国の屑野郎だと、司祭が前言を撤回(8場)。自動小銃の発射音。駐留地内でロバートが胸に男性雑誌をのせてうたた寝。妊娠9か月時点の胎児(Unborn Child)役の女優が、自分を射殺したロバートを非難。先制攻撃に対抗する一斉砲撃の巻添えになった〈事故〉だった、生まれて殺されるより、生まれずに死んだ方が無垢なままで幸運だ、とロバートは弁明。生まれていればメアリーという名前を貰うはずの女の子だった(9場)。5場の続き。バクシーが、イギリス人はアイルランド人に新旧2宗派の相違があると認識できないし、そもそも神はイギリス人だと彼らは信じている、と語る(10場)。マリリンがやはり録音機に向かって喋る。1979年11月、雨のそぼふるカトリックのミルトアウン墓地に向けられた監視カメラ('electronic eye')が作動中(11場)。ロング・ケッシュ監獄のキアランが観客に訴える。〈テロリスト〉はときとして〈ゲリラ〉や〈自由の闘士〉と呼ばれるが、アイルランド人の場合は決まって〈人殺し〉や〈テロリスト〉である、監獄で過酷な尋問や拷

間を受けるのもやむを得ない、精神まで拘禁することはできないからだ、と。司祭が登場し、十戒の5条にあるように、いかなる理由にせよ、人を殺してはならない、と叫ぶ(12場)。9場の駐留地。同僚兵士アンディ(Andy)が発狂して「くたばれ、女王」と叫んで味方に発砲した事件以来、ロバートも兵役の意味に悩みを抱き、上官テリー(Terry)から兵士失格だと、どやされる。アンディの棺に恐怖するロバート(13場)。BBC放送の編集長デイヴィッド(David)の部屋で、マリリンは自分が現地取材した北アイルランド関連番組の放映中止を直前になって告げられ、激怒する。抗議辞職しても何も変わらない、と諭すデイヴィッドに、BBC上層部は物議を醸す危険人物は、番組もろとも葬り去るのよ、と反論(14場)。パブにいるキアランとケヴィン。3場の1972年から9年経過した〈現在〉。刑務所を出所したキアランは、「アイルランドが自由になるには、ドネゴールからコークまでのあらゆる電柱に司祭を縛り首にして吊さないといけない」と放言、カトリック兵士がこれを聞き咎めて二人をパブから追い出す(15場)。機動隊装備のロバートが、兵卒(squaddie)だけが現実には紛争の恐怖を知っている、として、狙撃兵の光る眼にたえず怯え、カトリック娘からは侮蔑のまなざしを浴び、8歳ぐらいの少年がレンガと割れ瓶を手にひるまず突進してきた恐怖を語る。反撃することは「憎しみをいや増すだけで、戦車では憎しみに戦えない」(49)のだ(16場)。10場[11場、は著者の誤記]の続き。バクシーが、イギリスは世界中のイギリス化を目論む帝国主義者だが、アイルランドはイギリス化しないことを金科玉条としてきた、「英国文化」なるものはたった一杯のビールで天気と株の話をして夜を明かすことだ、と酷評(17場)。1981年、マリリンがエウロパ・ホテルで執筆中。〈真実〉を語ることは困難で、せめて自分の目に〈真実〉と思えることを語ろうと努めるが、今世紀最長の戦争でありながら、マスコミの扱いも次第に小さくなり、「誰も気にとめていない」のが冷酷な現実である、と(18場)。マリリン、ロバート、司祭がそれぞれ直前の場の姿勢で活人画となり、キアランの台詞「精神は拘禁できない。そこには自由がある」で暗転(19場)。

④『北』(North) 1幕全19場

緩やかなボズラン・ドラム(Bodharan drum)で幕を開け、前口上の詩が朗唱される(1場)。ベルファーストの司教(Bishop)宅の居間。西ベルファーストの教区司祭(parish priest)で50歳ぐらいのクリリー神父(Father Crilly)が65歳の司教宅を訪問。カトリック左派新聞『アンダーソントウン・ニュース』に掲載された若いクイン神父(Father Quinn)の「知的マルキスト」風コラムはカトリック教会を誹謗する内容として、対応策を検討し、まず当人から事情聴取することに決定(2場)。ベルファーストの

IRAの秘密の隠れ家。ジョー (Joe) とリーアム (Liam) は当夜のダブリン行きを女性活動家フランキー (Frankie) に命じられる。子ども時代の遠足でダブリンに汽車旅行したことがある二人は、途中駅ドロヘダ (Drogheda) での迷信——オリヴァー・プランケット (Oliver Plunkett, 1625-81) が聖者の列に加わる⁴⁾ようお祈りし、ドロヘダ橋を渡るとき汽車から小銭を投げて3つの願い事をする——を懐かしく語る(3場)。ダブリンの秘密の隠れ家。ジョーとリーアムは1週間近くも連絡不通で苛々気味。ベルファーストのことを思い出すうちに、不思議なことに、敵対する英国軍パトロールや、ロイヤリストの行進さえもが、街の風景の一部として愛しく思われてくる。そこへ公安警察が踏み込み、二人に銃を向ける(4場)。作家で歴史学者のエリザベス (Elizabeth) と労働党左派議員ロイ (Roy) 夫妻の住むロンドンのアパートに、ロイの同僚議員スティーヴン (Steven) が食事に招待されている。エリザベスの執拗な問い掛けに答える形で、スティーヴンはベルファースト実情調査団員として派遣された旅が、「瞠目的」(eye-opener) で「打ちのめす」(debilitating) ような体験だったと告白。街はさながら、ひとつの巨大なメイズ牢獄^{ゲットウ}、スラム街は囲い地(compounds)、市内の中心部は検問所と兵士だらけの有様で、「紛争」('troubles') という生ぬるい形容はまったく不適切、社会主義を標榜しながらこの抑圧状態を黙視してきた自身の責任の重さを考えれば、反帝国主義、反植民地主義、反人種差別主義の立場を貫き、アイルランドの自由の支援者であらねば、と説く。新旧両派の労働者の利益、およびそれぞれのアイデンティティ確立のための前向きの方策が必要と説くロイに、ネオ・ファシストのユニオニスト党の単一支配や直接統治は誤りで、軍の撤退と時限を切った政権委譲こそ問題解決に欠かせない、とスティーヴンは反駁(5場)。ベルファーストのプロテスタント労働者の家。デレック (Derek Smith) がロンドン移住の荷造り中。友人サム (Sam) と同居予定だが、母親は食事 (grub) のことなど心配(6場)。二人が乗った船が波止場を離れ、ベルファーストの美しい夜景を眺める(7場)。パディントン^{パディントン}の長屋。最初の大家が自殺し、現在はべらぼうな家賃 (pay through the nose) の狭い下宿住まい。デレックは北アイルランドのプロテスタントが、ロンドンでは単に「アイルランド人」として、カトリックと十把ひとからげの扱いを受ける現実を痛感(8場)。2場に戻り、クイン神父のコラムの一節——「教会もしくは一部の聖職者は、北アイルランドの政治現実に関して、信者たちと共鳴していない、とまでは言わないものの、同調していないのではないだろうか?」——は、教会を激しく攻撃するもの(onslaught)だ、とクリリー神父と司教が批判すると、思索の刺激や信徒との開かれた議論を意図したもので、特定の個人攻撃でもないし、第一、疑問文の問い掛けだと弁明。ではその問いの君の答えを聞こう、と司教は詰め寄る(9場)。ダブリンの警察の取調べ室。50

代の公安警察官が、理想主義者の愚行だとリーアムを諭す。もうすでにアイルランド共和国は成立しており、IRA / ロイヤリストの如何を問わず、国家の平和を乱されたくない、統一アイルランド実現に向け共和国がIRAに関心があるなどと考えるのは「馬鹿な真似」(pissing in the wind)である、と(10場)。ロンドンの建設現場。作業開始時間を過ぎても新聞を読みさぼっているデレックを、コックニーの現場監督ロンが「パディ」呼ばわりして注意し、喧嘩になる。転倒したはずみに鉄桁(iron girder)に親方が頭をぶつけて倒れ、動かなくなる(11場)。9場の続き。クイン神父は暴力と教会の姿勢の問題に言及する。もちろん殺人は殺人で糾弾されねばならないが、軍やロイヤリスト過激派といった権力側の手になる暴力もまた同罪であるのに、教会が非難する際には〈体制からの暴力〉と〈体制に対する暴力〉とでは明らかに温度差があると人々が感じ、みずから暴力に走らないものの、暴力を受動的ながらも支持し共鳴していること、アイルランド史では教会は英国政府という体制に9割方、味方してきたこと、このままでは教会への帰依は揺らぎ、〈カトリック教会〉対〈キャスリーン・ニ・フリーハン〉という分裂信仰になっており、426年以来、有力なキリスト教国家であるアイルランドを存続させるために教会は尽力せねばならない、と指摘する。これには司教もいたく同感し、〈キリスト教〉対〈異教〉という精神分裂症気味の二重の忠誠心が北アイルランドにはたしかに存在し、もともとの原始の異教にキリスト教が乗り、さらにその上に無責任な(free-wheeling)ペイズリーの長老派教会主義がかぶさる三層構造がある以上、もめごとがあるのも不思議ではないし、まさに混沌と狂乱を作る調理法だと応じ、二人の見解の溝は一気に埋まる(12場)。ロンドンの警察署の取調べ室。私服刑事がデレックに、現場監督は依然重態と告げ、目撃証人がいない以上、事故や正当防衛と断定できない、君は政治団体の一員、つまりロイヤリストであるかと尋問する。〈王冠に忠誠をもつ〉(loyal to the Crown)という原義からすれば、自分はロイヤリストであるというデレックの答えに、刑事は言質をとる(13場)。5場の続き。食事後のコーヒーを飲みながらの議論。ロイがスティーヴンに、統一アイルランドができたなら、プロテスタントはどうなるのか、軍を撤退させればいっそう血まみれの内戦になるだけだ、と応酬する。スティーヴンは、大英帝国最後の植民地アイルランドは即刻放棄すべきこと、軍を撤退させれば少なくともイギリス人犠牲者はいなくなり、内戦で死ぬのはカトリックとプロテスタントの〈アイルランド人〉に過ぎない、つまり北アイルランドのプロテスタントは〈アイルランド人〉として切り捨ててしまえば、それで話はお終いだ、と言い放つ(14場)。10場の続き。獄中のジョーとリーアムの対話。北のカトリックに共和国は冷淡だし、北のプロテスタントにイギリスは関心がない、つまり、北アイルランド人にはどこにも味方がいない、プロテスタントも心の底では、

いつの日か英軍が撤退し、見捨てられる (sold down the river) ことを覚悟している、だから撤退の暁には北のカトリック、プロテスタント双方が銃器を手に国境を越えてなだれ込み、南の高利貸し野郎 (gombeens) こそ観念する (up against the wall) 番だ、と、突飛なくアイルランド共和国侵攻計画をリーアムはぶつ。突如、爆発音が轟き、IRA 仲間が脱獄 (break-out) に駆けつける (15場)。12場の続き。思いも掛けない展開 (turn-up for the book) だが、司教もクリリー神父も、クイン神父を実は先見の明のある優秀な神父と見直し、新聞へのコラム連載を是認する方針を固める (16場)。3場に戻る。脱獄後ジョーは逮捕されたが、リーアムは必死に国境を越えてベルファーストに戻った。なぜなら、同じ牢屋に入るなら、南のアイルランド人になぶられるよりも、同郷の北のプロテスタントから虐待されるほうがまだ、という。そこへ、包囲を告げ投降を促す英軍の拡声器の声がして、リーアムは微笑む (17場)。ロンドンの留置所。ベルファースト出身のカトリックの浮浪者ジョニー・ギルモア (Johnny Gilmore) がデレックに話しかけ、宗派は違うが互いに意気投合。デレックは、北のプロテスタントの疎外感、つまり忠誠を誓う相手から疎まれ軽蔑される、孤立無援 (out on a limb) の境地を語る。刑事が登場し、危篤の現場監督の死亡を伝える (18場)。14場の続き。酒を飲みながらの会話。今まで聞き役に回っていたエリザベスが酩酊したかのように演説をする。曰く、ロイの主張もスティーヴンの主張も愚論であり、イギリスは泥沼 (quagmire) の英愛関係において、つねに美德と忍耐の模範 (paragon) であったこと、イギリスのアイルランドへの関与に、古臭い帝国主義のレッテル貼りは無理なこと、20世紀国際政治の視点からは、アイルランドは東洋の核攻撃の通り道にあたる戦略上の重要拠点であり、世界の覇権構図が一変するまでは、アイルランドに軍隊は駐留すべきだと論じる。戦略地点を示す点滅ピンを刺した世界地図の背景幕が降りてきて、最後にアイルランドのピンだけが光り、暗転 (19場)。

結末は意想外に飛躍した議論だが、『連合法』と同様に、イギリスを含んだ北アイルランド問題の三角関係の複雑さや微妙さは、次の言葉に要約されるだろう。——「6州にいるときはイギリス人だとかロイヤリストとかかも知れないが、いったんリヴァプール行きの船を降りたり、ユーストン駅を出れば、イギリス人には…俺たちはみんなアイルランド人なんだ! (WE'RE ALL PADDIES!) しかも、やつらはカトリックとプロテスタントの区別がつけられない。実際、どちらかといえば、イギリス人は、「北」出身のイギリス人である俺たちよりも、ケリーやコークの連中と仲よくやっているように見える。」(161)これは、ロイヤリストの疎外された境遇を見事に浮かび上がらせる台詞である。

⑤『マリア慈善療養院の男たち』(Mary's Men) 2幕 (各1場・3場の全4場)

ベルファースト街頭の果物露天商 (barrow boy) フープス (John 'Hoops' Maguire) が威勢よく客に声をかけ、林檎や蜜柑を売りさばく。別の通りでは花売り男セカンズ (Seconds Kelly) がしゃっくりして萎んだ花を落としたり、思いだし笑いするが、ちっとも売れない。一方、フォールズ公園ではバンカー・ジョー (Banker Joe) がひねもすベンチに腰掛けて読書。また、裏通りのクラブではエンジェル・フェイス (Angel Face) が、ちびのイギリス兵に英語でなくアイルランド語で応対してからかった自慢話を吹聴 (序)。マリア慈善療養院 (Legion of Mary hostel) の食堂。50代後半で住込み常勤職員〈おどけ者〉アレックス (Cod Alex) ——もとは演芸館芸人——が配膳、本業はワイン商の簿記係で、ここの非常勤職員の〈せむし〉のハリー (Hunchback Harry) は調理場。判で押したように夕刻6時5分にまずフープスが戻る。もとプロ・サッカー選手 (名前^{フォワード}衛でありながら政治的理由で2軍落ち、とは当人の弁) だった彼は、選手時代の習慣で4時半には夕食を済ませている。(名前のフープスは、サッカー場の〈大歓声〉(whoops) に由来)。続いて泥酔状態のセカンズが帰宅。いま50代で、元バンタム級世界チャンピオンのボクサー (scrapper) の彼は、イギリス人ボクサーに反則強打され出血し、歯も視力も王座も奪われた最後の試合のことを酔って喚きちらす。小柄だがハンサムで女に持てた名サウス・ポー時代の栄光の日々をフープスは賞賛し、アレックスとともに彼を介抱してベッドへ運ぶ。続いて、〈銀行員〉ジョー (Banker Joe) が帰宅。60歳で元銀行支店長 (bank manager)、芝居通で読書家の彼は、戸外の荒れ模様の天気にかこつけて『リア王』の嵐の名場面を演じながら登場。銀行マンにしておくには惜しかった、とおだてられ、ベルファーストはダブリンに負けにくいらい才能ある人物を輩出してきたと、俳優では Liz Begley, Joe Tomelty, Harold Goldblatt, J.G.Devlin, 画家では William Conor, George Dillon, 作家で Sheils, Sam Thompson, Tomelty, St John Ervine, ボクサーでは Rinty Monaghan, Jonny Caldwell, Freddie Gilroy, サッカー選手では Charlie Tully の名を挙げ⁵⁾、ベルファーストがヴィクトリア風のくすんだ工業スラム街とみなされがちなのは、郷土を捨てて外国へ出たうえ、郷土を悪し様に描いた〈墮落したエグザイルたち〉のせいだ、力説する。われわれは政治、宗教、芸術の分野でも酷評され (castigated)、ユダヤ人同様、この世でもっとも軽蔑されていると、ハリーも応じる。そして、優れた才能に恵まれながら開花させられずに終わった逸材の例として、ジョーは自分の甥オリヴァー・ドイル (Oliver Doyle) の話をする。俳優、水彩風景画家、歌手と多彩な天分を發揮したが、地元の劇作家 Thomas Carnford [Carnduff (1886-1956) の誤記か] の、〈ユニティッド・アイリッシュメン〉を扱ったある芝居で、敵役のカーズレイ卿 (Lord

Castlereagh; Robert Stewart) の役をかつて演じたことがあった。そのとき彼は「悪役を演じることは最高の贈物だ、なぜなら、どんなに悪行の限りを尽くした悪役でも、ひとりの生身の人間であり、心底の悪人と見做せないことが、実際に演じれば肌で分かるからだ」と含蓄のある言葉を残したという。その才能豊かな甥もいまでは、食って行けない芝居を諦め、子ども4人の幸せな所帯をもってよき夫、よき父の役割に徹しているという。「犠牲は芸術を生み出すが、才能を犠牲にせねばならない者はどうなるのか? この惨めな街はそうした連中で一杯だ。このマリア慈善療養院は彼らで一杯だ。」——途中からこのジョーの話を持ち聞きしていたフープスはこれに激しく反論。この療養院にいるのは、盛りをすぎて〈落ちぶれた連中〉(has-beens) と、そもそものぼりつめもせず、ろくに〈芽の出なかった連中〉(never-was's) の二種類であり、早くお迎えが来て楽になりたいと願う、酔払いにワイン中毒やろくでなしども、つまりは虱、南京虫、ゴキブリの類だと一蹴する。ふたりはつかみ合いになるが、ハリーが仲裁。最後に〈天使の顔〉エンジェル・フェイスが帰宅。60歳で小柄で天使のような白髪頭で、〈旧IRA〉として1950年代に政治活動をした彼は、アイルランドが過去800年に30年おきに反乱を起こしながらことごとく失敗してきたのは、イギリス人がずるがしこいからだ、昔の筋金入りのIRA闘士は地の果てまでも報復活動に専念した、と賛美し、'We always get our man'を歌って踊る。これにまた先程同様、フープスが水を差す。曰く、ロマン主義者や〈神話作者〉(myth-makers)のたわごとであり、いっそのこと、アイルランド人とイギリス人を強制結婚させる法律でも施行すれば、アイルランド人のロマン主義とイギリス人の実用主義とが合体して均衡のとれた民族が誕生する、と声を荒げる。そこへ、酔いから醒めたセカンズが顔を見せ、座の緊張がとけ余興が始まる。ジョーはシェリーの詩を暗唱し、ハリーがアイルランド語の歌を歌い、アレックス(当時の芸名は〈タップダンサー〉)ジョウンズ [Hooper Jones]) が踊り、(フープスを除く)全員でアイルランドの踊りに移り、「モーン山」の合唱で1幕を閉じる。2幕は、翌日早朝の同じ場面。ハリーが先に起きて朝食の準備。前夜、酒もないのに踊りまくったアレックスは疲れて遅れて登場。宿泊人のなかでは、フープスがやはり一番に現れるが、昨夜の出来事をめぐって再び口論となり、姿を消す。続いて、ジョー。劇場があり店舗が軒を並べる華やかなりし頃のベルファーストの街を懐かしむ。賑やかなこの街のとくに中心部 (city centre) を墓場のように寂れさせたのは、IRAの爆弾テロというよりも、環状道路を巡らし都市再開発を進めた市役所職員らの官僚組織だといって、退出。エンジェル・フェイスも現れ、朝食をすませてこっそりとハリーに酒をねだるが、午前9時半退去の規則に従って、寝ぼけ眼のセカンズともども、外へつまみ出される(1場)。同じ場面の夕方6時35分。定刻をすぎても現れない

フープスをアレックスとハリーが噂していると玄関のベルがなる。しかし戻って来たのは、昨夜とうってかわって素面の顔付きのセカンズで、彼はフープスは死んだ、と告げる。ちょうどBBC ラジオ・ニュースが爆弾テロの犠牲者となったフープスの名前を報じる。(エンジェル・フェイスが酩酊して帰宅。) セカンズはこの日フープス(彼は昨日までずっと断酒していたのだが)と一緒に昼間からパブで酒を飲んでいて、馬券を買いにちょっと離れたあと自動車爆弾騒ぎが起き、片腕だけのフープスの無残な遺体を目撃して、呆然となって駆け出し、警官に不審がられて調書までとられたという。愕然としながらも、アレックスは遺体収容とミサの手配に出て行く。行き違いで帰宅したジョーも知らせを聞いて驚く(2場)。棺を4人で抱えて登場。遅れて司祭とセカンズ。〈最後の晚餐〉のように観客に向かってテーブルにつく。ミサが始まると棺が開き、フープスが中から出てきて、テサロニケ書を朗読するジョーや、涙声のセカンズの背後に立ち、ここの連中はみんな〈神話作者〉だという主張を崩さず、死んでなお強がり姿勢を貫きながらも、ハリーやアレックスにやさしく声をかけて、また棺に戻る。聖母を称えるプーランク作曲「サルヴェ・レジナ」の音楽の流れるなか、最初と同様に棺をかついで退場(3場)。——元サッカー選手、元ボクサー、元IRA、元銀行員——人生の盛りを過ぎ、住む家のない4人の男たちが夜露をしのぐ慈善施設を舞台に、そこを運営する2人の職員との交流を描く作品。主人公フープスには、自分も含めて、過去の栄光を美化して〈神話化〉し、人生の困難を酒や文学に陶醉することで忘却しようとする心の持ち方が我慢ならない。彼はそういう自分を棚上げしている訳では決してないので、彼を偽善的だとか独善的だとかいう批判は当たらない。しかも、老いてなお何に生き甲斐を見いだせばよいのか、を問う意味では、この戯曲は普遍的な主題を持つといえる。「弾丸と爆弾には気をつけてな」「3度も身体検査されずにどこで果物が買えるかね」(97)といった台詞は、80年代当時のベルファーストの雰囲気を伝えるものであろう。

(2) 第2戯曲集『ヨーロッパの墓場』

『ヨーロッパの墓場』と題された第2戯曲集は、ヨーロッパを舞台とする3つの作品を収めている。そのうちの『スペインの芝居』と『ドイツとの関わり』は同名の登場人物が主人公であり、前者がスペイン市民戦争(1936-39)を、後者が第2次大戦(1939-45)の時期を扱っている点で、いわゆる連作ものとみなせる。この2作は同じ年(1986)に異なる劇場で初演されているようだが、二本立て(double bill)の通し公演で上演されれば、大河小説風に奥行きが出てくることだろう。1990年秋に著者が書いた序文を引用しよう。

『スペインの芝居』は、2人の労働者階級のアイルランド人、1人はカトリック、1人はプロテスタントが、様々な国や宗教、階級の出身の人々と団結して、自由と社会主義の人道的理想のために団結する物語である。西洋「民主主義国家」とカトリック教会の援助と黙認のせいで、スペイン共和国がファシズム勢力に敗北したのと同様に、彼らもまた挫折する。ファランヘ党員 (the falangist: フランコ政権下のスペインで唯一の公認政党) に司祭や司教、枢機卿や尼僧が敬礼するのを彼らは目撃した。現在われわれはヨーロッパ各地で「社会主義」の終焉を目撃する。「全体主義」国家の崩壊を目撃する。西洋は赤の帝国の解体を小躍りして喝采しているが、他にはなにに気付くだろうか。しっかりと眺めれば、司祭や司教たちが聖職の石の下から這い出して、イデオロギーの締付けをポーランドやチェコスロヴァキア〔訳者注記：1993.1.1.に分離〕、ハンガリーに行おうと手ぐすねをひいているのが分かる。彼らは、自由や民主主義の良き指導者や代行者であろうか？ポーランド人の法王が「キリスト教ヨーロッパの精神的統一」を主張していると聞く。ちょうど50年前、600万人のユダヤ人のショア (Shoah) の責を負うべき、キリスト教ヨーロッパの「精神的統一」と、これは同じものなのだろうか？これが、つい最近になってキリストの死に関してユダヤ人を「許した」同じカトリック教会だろうか。これが犯罪中の犯罪、ホロコーストに荷担したことをいまだに承認しようとしぬ同じカトリック教会だろうか？これが、ユダヤ人殉教者イーディス・シュタイン (Edith Stein, 1891-1942; 訳者注記：ドイツのカトリック哲学者でフッサール Husserl の弟子。ユダヤ教から改宗後カルメル会修道女となったが、Auschwitz 収容所でナチにより殺害された) を聖者の列に加えるために、〈ドイツ〉を訪問する同じ法王だろうか？この法王は、カルメル会修道院をアウシュビッツの死の収容所に存在させる、同じ自由の指導者だろうか？私はアイルランドで生れ育った。その国では大多数がカトリック信者だが、カトリック教会は、抑圧に対する闘いにおいて人々に手助けをしたことは一度もない。実際のところ、カトリック教会が政府や抑圧勢力とつねに共謀し、そしていまでも共謀している国なのだ。それでいて大多数の人々が依然として祭壇に群れをなして集まる。これは恐怖のせいだろうか？ローマ法衣をまとった人々に、もし卑屈に追従しなければ、「忠実な信者」にも天罰を約束するような宗教と教会に対する恐怖や脅威だろうか？アイルランドのカトリック教会は人々の心を侵害し、自由思想の試みを計画的に破壊してきた。宗教は、多くのイデオロギーと同様に、権力の獲得と維持に腐心する。自由や気儘という観念に宗教は馴染まないのだ。宗教は恐怖心で支配するものであり、思考体系の恐怖は、戦車や銃の恐怖よりもつねに大きい。アイルランド人のなかには占領軍を非難する者があるかもしれないが、自分たちの心を占拠しているローマ・カトリックの権力を非難したり認識したりすることができない。ヨーロッパの他の国の人々は背後に注意するのが賢明だろう。全体主義はさまざまな不思議な形でしのびよるものだ。

⑥『スペインの芝居』(The Spanish Play) 1幕全16場

舞台はベルファースト。カトリックの労働者階級のロビンソン家の息子ビリー (Billy) はスペイン労働者を支援するため市民戦争に参加することを父親ジミー (Jimmy) に告げ、宗教・政治上の立場から反対される。つまり、無関係な外国の戦争に加勢しなくとも、アイルランド国内に戦う対象はあるし、スペイン市民は「教会を略奪し、司祭を狙撃し、尼僧を凌辱し、カトリック学校を爆破している」(15)が、「我々の自由の闘争はカトリック聖職者を射落とすことを含んではいない。我々の自由を求める闘争はカトリックであることを認めてもらうための闘争だった」(16)からである。一方、気丈な母親ロウズィ (Rosie) は、かつて実弟を独立戦争の際に〈ブラック・アンド・タンズ〉に射殺された忌まわしい記憶を消せないが、息子の心意気に感動し、

敢えて戦地へ送り出す(1場)。ロンドンの家で、男からスペイン不法入国の段取りをビリーは聞く。そこへもう一人の志願兵トミー・リード (Tommy Reid) が登場。同じベルファースト出身ながら、〈宗旨が異なる〉 (kick with the wrong foot) 二人だが、国際旅団で戦う共通の目的の友愛で結ばれる。〈ロビンソン〉という名前が暗示するように、ビリーの祖父はプロテスタントだったが、カトリック女性と結婚して宗旨変えたため、一家は今日カトリックである事情が明かされる(2場)。二人の若者はパリのホテルで、他の同志3人——サミー・コーエン (Sammy Cohen)、ジョン・コーンウォール (John Cornwall)、フェリシティ・スマイズ (Felicity Smythe) ——と出会う。フランス女性ジーンが参戦の最終意志確認を行い、全員の同意を取りつけ、ピレネー越えの手順を説明(3場)。ピレネー山麓の納屋。サミーはロンドン訛りのユダヤ人、ジョンはケンブリッジ卒の詩人でイギリス共産党員、フェリシティも同じく共産党員で風景画家、しかも官庁勤務の父親をもつ良家の令嬢だが、画家の道を歩むことを反対され、家族への腹癒せという個人的理由から参加したと漏らす。やがてスペイン人ガイドが登場し、厳寒の山中を徹夜で越えてスペイン入り(4場)。ベルファーストに場面転換。スペイン市民戦争の解釈をめぐり、2人の神父の立場が対立。オニール神父 (Fr. O'Neill) はこの戦争を、〈富裕な特権階級と貧窮した労働者階級〉の戦いととらえ、スペインへ派遣される外人部隊やモロッコ軍は、アイルランドを武力鎮圧した〈ブラック・アンド・タンズ〉と同罪であると断言する。共和国政府はスペイン国民によって選出されたのであり、反乱を起こしたファシストたちは、偽りの愛国者、偽りのキリスト教信者、ちょうどアイルランド史における、ゴフ将軍 (General Gough, 1870-1963) やカーソン (Edward Henry Carson, 1854-1935) と同列だと言う。一方、カニングム神父 (Fr. Cunningham) は、この戦争を政党間の覇権争いでなく、〈キリスト教と共産主義〉の戦い、すなわち〈神と神の敵〉との戦いであると規定し、共産主義や無政府主義のたたり (scourge) が地上から一掃されんことを祈願する。ロビンソン家ではロウズィがジミーに、同志たちとの出会いなどを近況報告するビリーの手紙を読み聞かせる。詩人や芸術家が戦列に参加していると知って、ジミーは軽蔑するが、復活祭蜂起のパトリック・ピアスも詩人だったでしょ、とロウズィがたしなめる(5場)。「死の森」の戦闘場面。激しい銃撃戦がおさまり、お互いの安否を確認するが、ジョンの戦死にビリーたちは気付き、遺体をシートにくるんで搬送。エリート特権階級のジョンがどうして無産階級のために戦ったのか合点がいかなかったトミーだが、やがて「つまり、生まれ落ちた環境——国家とか階級とか、じゃなく、その人の実体、内面」(37)こそが大事だと認識する(6場)。次の場面は束の間の休息で、フェリシティがトミーに家族や故郷のことを尋ねる。父親エドは造船工場 (Harland and Woolff) 勤務、

母親は主婦、彼は一人っ子。ビリーはスペイン女性マリアに、どうしてカトリック教会がスペイン国民に寝返ったのか、事情を聞く。サミーは同じユダヤ人の恋人ミリアムに手紙を書く(7場)。舞台に散乱した、銃剣の突き刺さったマネキンが、ナショナリストによる農民虐殺を示唆する。銃剣には、キリストとフランコ将軍の合成写真が貼られている。子どもを含む村中のすべての人々が射殺された現場に、逃げ隠れていた老婆が戻ってきて、マリアとスペイン語で言葉を交わし、彼女が逐一通訳する。事件の真相を伝えるために神が自分の命を救ってくれた、殺された犠牲者は勿論のこと、ファシストたちのことも祈らねばならぬ、と老婆は言うが、トミーやビリーにはこの申し出は堪え難い(8場)。記念日の賑やかな祝賀会。オニール神父の講話から推察すれば、この日はウルフ・トーン (Theobald Wolfe Tone, 1791-1828) の命日 [10月10日] のようで、トーンが、アイルランドにはカトリックだのプロテスタントだの^{ダイセンター}非国教徒だのといった区別はなく、ただアイルランド人あるのみだ、と語ったことを引いて、アイルランドの自由はスペインの自由であり、世界の自由だ、と謳いあげる。善良な者はつねに少数派であり、キリストはたった12人しか弟子がいなかった、と神父が言うと、いまやアイルランドでは、オダフィ⁶率いる青シャツ党のファシストと教会が懇ろになり、国民詩人イエイツまでがファシスト行進曲の作詞をしたではないか、とビリーはからんで挑発し、神父から平手打ちを食う。ビリーが逆上したのは、前場で、多くの無残な農民の遺体を目の当たりにした衝撃ばかりでなく、遺体に〈聖心〉とフランコ将軍を合わせた絵がつけられていたせいだった。ビリーはローマ教会に絶縁を宣言し、会場を去る。後を追ったマリアも、大地主と教会が癒着するスペインの実情を語り、かたくなな教会不信を口にする。「司祭は権力者であり、権力は人々を破壊する…権力は敵だ」(49)と。教会批判で気持ちが一致した二人は互いに愛を告白(9場)。腕を負傷したトミーに帰国命令が出され、何度も抱擁してフェリシティに別れを告げる(10場)。オダフィと青シャツ党員の帰還を祝う催し。まず市長が挨拶にたち、青シャツ党員の功績を称える。続いて、マクナマラ猓下が「カトリックと共産主義者とは二股かけられない」と明快な説法、オダフィの演説が始まったところで、声が消え、トミーが観客に向かって真相を解説する。すなわち、攻撃参加要請をうけたとき、多数の人命損失の危険を理由にオダフィは拒否したこと、オダフィに反旗を翻した挙句に帰国を要求したこと、など、つまり青シャツ隊は英雄的偉業など少しも達成しなかったという(11場)。一転して、人民戦線側が司祭を処刑し、尼僧を凌辱する場面がマネキンによって演じられる。サミーは心痛の余り、ずっと祈りを唱える。社会主義への道程は犯された尼僧だらけ、などとジェイムズ・コノリーは言わなかったぞ、と憤激するビリーを、あの尼僧はファシストで、真のカトリックではないから殺されて当然だ、

とマリア。「革命は死んだ」と絶望的に叫び、立ち去るビリー (12場)。フェリシティがマシンガンで乱射するが、敵の射撃を浴びて息絶える。トミーが戻り、亡霊のフェリシティと言葉を交わす。「敗北しても死んでも、少しは幸せよ。ここにいて、戦って、愛したもの。私はここに来たんだもの」(59) (13場)。ビリーとサミーが野宿を重ね、山道を辿ってスペインを離れようとしている。サミーが大声で祈禱したせいか、ゲシュタポ(ナチスドイツの秘密国家警察)に包囲され、逃走したサミーは背後から撃たれ、さらに無用のとどめの3発を浴びる。ビリーもユダヤ人と思われて危うく射殺されかかるが、別の士官が交換捕虜要員だと押しとどめる。このあと投獄され、銃殺音の飛び交うなか、イエズス会のガンバラ神父が最後の告解のために訪れ、ビリーの不気味な笑い声がこだまする(14場)。国際旅団の帰還の場面。スペインを代表してのマリアの感謝の挨拶に、トミーの皮肉交じりの台詞が交錯する(15場)。ベルファーストのロビンソン家。ビリー失踪の報をトミーから聞き、父親ジミーは息子の臆病さに激怒。「もし敵がどいつなのかわからなくなったら、まずは殺しといて、後で聞きゃあいいんだ。良心なんぞ平時の贅沢だ。」母親ロウズィは、オニール神父から息子生存の一縷の可能性を聞かされ、「簡単なことだと昔は思っていましたよ。『汝の隣人を汝のように愛せ』と、子どもの頃に教わりました。でもどうやって愛するのですか？愛はいつも犠牲を意味するのですか？…愛は次から次へと犠牲を要求します。」やがて、その場の皆がひざまづいて祈りを捧げる。スペイン国旗を掲げるマリア、牢獄のビリーに照明が当たり、ヒトラーの演説の声と行進の軍靴が祈りの声をかき消す (16場)。

戦争の悪夢を描く戦場物の点では、この芝居の前年に初演されたマギネス (Frank McGuinness, 1953-) の『ソム川へ行軍するアルスター兵を照覧あれ』 (*Observe the Sons of Ulster Marching Towards the Somme*, 1985) を彷彿とさせる。

⑦『ドイツとの関わり』 (*The German Connection*) 2幕 (各9, 6場の全15場)

ふたたび、作者の序文を引用しよう。

『ドイツとの関わり』は、ナショナリストの先祖の狭隘な境界を拒否して、ナチズムの勢力と戦い、ヨーロッパ解放のため戦死する労働者階級のアイルランド人の物語である。今日、ヨーロッパ各地で、旗や紋章を振り回して行進し、部族への忠誠心を謳う喧騒を目にする。〈この土地はX人のものだ〉〈われわれはY人だ〉〈Z人は分離と独自の国民国家を要求する〉、といった具合に。アイルランドで、私はナショナリズムという乳首を吸ってきた。過去20年間、ナショナリズムと部族のアイデンティティが、イギリスとアイルランドという西洋の2つの島で、互いに殺しあい苦しめあう様子を私は見てきた。過去10年間、12を超える芝居を書き、詩人シェイマス・ヒーニーの言うように、「間にこだませよう」と努めてきた。結論は？—結論はなにもない。しかし、私がおっとも情熱的に信じていることは、人々を内にこもらせ、ばらばらにするものは、結果的には殺戮と早死に終り、一方、我々を外へ引き出し、互いの方へと向かわせるものは、ことによるとだが、啓発と長寿につながるかもしれないということだ。

1941年のベルファーストが舞台。『スペインの芝居』と同じ設定で、カトリックのロビンソン家は、父親ジミー、母親ロウズィ、息子ビリーの3人家族。ビリーには、プロテスタントの友人トミー・リード。第2次大戦が始まり、かつてファシスト打倒のため従軍したスペイン市民戦争で戦死したイギリス人の恋人フェリシティの供養のためトミーは再び出征を志願する。しかし、1916年の復活祭蜂起でピアスとともに中央郵便局に立て籠もったほどの生粋のナショナリストであるジミーには、英軍を支援するなど到底我慢ならぬことで、「イングランドの敵はアイルランドの味方」である以上、ヒトラー率いるナチスでさえ、アイルランドの味方だと強弁する。イギリスが独立の約束を反古にするのは目に見えている、第1次大戦でもソムムに泥の墓が築かれたではないか、と。母親ロウズィが帰宅し、オニール神父の依頼で、イギリス人の戦争疎開家族の受入れに同意し、明日到着予定だと伝える(1場)。ベルファーストの埠頭。ミリアム (Miriam Jacobs) と7歳半の娘のレイチェル (Rachel) をロウズィが暖かく迎える (2場)。ロビンソン家での夕食後の台所。新旧宗派いずれに属するかを名前 (handles) で識別するこの街で、この新しい客人の名前は分類に当て嵌まらない。ミリアムの両親はルーマニア出身のユダヤ人で迫害を逃れてマンチェスターに移住し、本当は賛美歌歌手 (chazan) を目指した商売下手な父ネイサン (Nathan) は5年前に心臓発作で他界、ドイツ系ユダヤ人 (いわゆるアシュケナジ [Ashkenazi]) の母エステル (Esther) も跡を追うように肺炎で死去、と涙の身の上話。帰宅したビリーとミリアムは握手(3場)。いつ父親は帰るの、戦争ってなに、と訊く娘に窮するミリアム。トミー・リードが来訪し、明日入隊の知らせを伝える。(『スペインの芝居』7場でみたように) ユダヤ人同志サミーの恋人が、同じミリアムという名前だった、ビリーとは宗派こそ違いますが、労働者階級で社会主義者という共通点で友人なんだ、とトミー。ロウズィ、次いでビリーが帰宅し、出征するトミーの無事を祈る。戸外でトミーと出会ったジミーは、アイルランドはあくまで中立遵守、イギリス人以上にイギリス的なのがプロテスタントだ、とトミーを口汚なく罵る(4場)。夕食後、ミリアムがジミーに、なぜナチと闘うことに反対なのか、と質したことから、議論が沸騰する。ドイツとの戦争は、長年アイルランドを支配してきたイギリスを側面支援することにつながり、ケイスマント (Roger Casement, 1864-1916) への武器援助で明らかのように、ドイツは歴史的にアイルランドの盟友だった、と主張するジミー。ビリーは、ユダヤ人であるがゆえに惨殺された同志サミーの例を引いて、アイルランドの利害のみを中心に考えることの愚を説く。息子を臆病者呼ばわりしてジミーが出ていった後、ミリアムとビリーも気分転換に散歩に出る(5場)。フォールズ公園のベンチ。口論の種を蒔いたことを詫げるミリアム。ビリーは、父親が偏狭な妄想の虜なのはやむを得ない事情があるとして、父

親の経歴を話して半ば弁護する。すなはち、分裂独立の条約を拒否したデ・ヴァレラ派に属したジミーは、結局、内戦の敗北者となり、政治的自由や独立という古き夢や理想にとりつかれ、愛国的近視眼 (incapable of seeing beyond their nationalistic noses [96]) になっているのだ、と。そしてこんにちアイルランドが中立政策をとるのも、国論を二分した分割の痛みの為せる技である、と。ミリアムは彼の敗北主義的口調に反発し、戦争が自由をもたらさぬとしても、ファシズムが世界中を席卷する危険のある今、生き延びるためにこそ闘わねば、と訴える(6場)。台所に二人が戻り、ビリーは先に休む。ミリアムはビリーとの会話の模様をロウズィに報告。酔ったトミーも帰宅(7場)。早朝、スリップ姿で洗顔中のミリアムを見て、慌てて仕事に出かけるビリー。ミリアムのお陰でビリーは元気回復、また夢を抱くようになった、と感じるロウズィ(8場)。夕方帰宅したビリーはミリアム(昼間ロウズィと買物した新しい服を着ている)をフィッシュ・アンド・チップスの安い食事に誘う。ミリアムの夫は英国空軍のパイロットで、半年前から消息を絶っていると初めて聞き、不明を恥じ入るビリーに彼女はキス、二人は情熱的に抱擁する(9場)。

2幕はそれから3か月後のパブ。一時休暇で戦線から戻ってきたトミーと、ビリー、ミリアムの陽気な会話。しかし、入隊を決意した、とビリーが唐突に発言して、ミリアムは中座、後を追うと泣いている。自分のために戦死してほしくない、と言うミリアムに、愛のために闘うことだけが価値ある動機であり、「あるイデオロギーのためだけに戦うこと、理想とか抽象概念、つまり自由、民主主義、社会主義、なんだっていい、そのために戦うことは、議論の一部、しかもつまらない一部にすぎないんだ。ナチはイデオロギーのために戦っている。愛ゆえに——愛のために——戦っているならば、戦争は起こらなかつたらう」(112)。パブに残されたトミーに、悪酔いしたジミーがからんで挑発するが、トミーは相手にせず立ち去る(1場)。戦場からのビリーの手紙を読むミリアム。同名の恋人がいたユダヤ人同志サミーのためにも闘うこと、心の闇、独りよがりの絶望から自分を救ってくれた感謝と愛が綴られている。レイチェルが帰宅して、父親がいなくて寂しい、と漏らす。ロウズィはミリアムに、ビリーを愛しているか確認し、表情からとっくに悟っていた (a dead giveaway) と語る。行方不明ながら夫のいる身だが、ビリーを心底、愛しています、とミリアムはしっかり言い切る。軍服姿のビリーが登場(2場)。波止場を見下ろすブラック・マウンテンのビリーとミリアム。二人は抱擁し、大地の上で愛し合う姿がシルエットに映しだされる。一方、ロビンソン家の台所にはロウズィとレイチェル。そこへ〈ジミーが差し向けた〉友人と名乗る2人組の男がやってきて、「ユダヤ人の人妻」(married yid) かつ「イギリス女」とファックする「裏切り者」ビリーの居場所を尋ね、ロウズィをはがいじめにし

て、壁に掛かっていた英国軍の軍服をずたずたに引き裂き唾を吐きかける。レイチェルは恐怖のあまり逃げ出す(3場)。家に戻ったビリーとミリアムは惨状をみて愕然。ロウズィが顛末を子細に説明し、夫の差し金による脅迫の事実打ちのめされる。隠れていたレイチェルが無事に戻ってくる。ビリーはジミーに会いに決然と出ていく(4場)。父親行きつけのパブで、ジミーとビリー。脅し屋を送り込む、意気地なしの最低の臆病者、とビリーは父親を罵倒し、アイルランドなんかくれてやる、と叫んで親子の縁を切る。やってきた例の2人組とこぜりあいになり、男がジミーをうっかり殴りつけ、ジミーは倒れる(5場)。荷物を抱えたビリーとミリアム、ロウズィとレイチェルが埠頭におり、まもなくイギリスに渡航するところ。レイチェルが「戦争ってなに?」と訊く。暖炉脇の肘掛椅子に座るジミーのシルエット。ベルファースト上空を飛来するドイツ軍戦闘機の爆音(6場)。

妻にも息子にも見捨てられるジミーの哀れさは、シングの『谷間の影』の結末にも通じる。また、2幕3場の分割場面は圧巻である。ビリーとミリアムが愛を語らい、その場で愛し合う山中の官能的な場面と、母親と少女のもとヘナショナリストの男たちが押しかけて威嚇する戦慄の場面とが同じ舞台上で交錯する。この後者の場面の緊迫感はおそらく、オケイシーの『ジュノーと孔雀』の息子ジョニー強行拉致の場面にも通じるものがある。新旧両派を二項対立で論じる不毛さは以下のトミーの台詞に端的である。——「この部屋には僕以上にアイルランド的な人間はいません…僕はこの国の分割に反対です。僕は自らの意思でのめり込んだ社会主義者(a socialist by commitment [sic], 74)であり、たまたま生まれがプロテスタントなのです。僕は共和主義者で、多くのアイルランドのプロテスタントがしかりです——もちろん思い出していただく必要もないでしょう、ウルフ・トーン、ロバート・エメット…」(74)

⑧『マーフィの娘たち』(*The Murphy Girls*) 1幕全15場

再び作者の序文によれば、「『マーフィの娘たち』はエグザイルの労働者階級のアイルランド女性の物語である。自分自身の国からは疎外され、宿り木からは遊離して、彼女は自分の帰属先が分からない。国籍や宗教の網から逃れたものの、自信喪失の網にとらわれている。もしかすると、我々誰しも、唯一の真の故郷は墓穴なのかもしれない。／私はロンドンという都市に住んでいる。その街には、ある作家が住んでいる。反逆の言葉を恐れる、ある宗教の大祭司たちから死刑宣告された作家。もう1年以上、身を隠している作家。すぐれた作家がみなそうであるように、自身の経歴の正統性に挑んだ作家。東欧のある地域[チェコ]では、劇作家ハヴェル(Vaclav Havel, 1936-)は大統領に選出された[1989.12-92.7]。サルマン・ラシュディ⁸⁾(Salman Rushdie, 1947-)は依然、死刑囚である。この序文は彼に捧げる。自由がやがて彼に訪れんことを。」

ベルファーストのオールダーグロウヴ(Aldergrove)空港着陸前の機内放送(序)。

39歳の二女ブリッド (Brid Murphy) が14年ぶりの帰国、通関でもめる (1場)。母親ノラ (Nora) と再会して抱擁。プロテスタントの老タクシー運転手は、ブリッドの目的地がカトリック居住区と聞き怯えたが、ロンドン在住の教師と知って一安心、実はイギリス人は余り好きじゃない、と打ち解けた。ノラは家族の近況報告—— (姉の) 長女アーニェ (Aine) は聖ドミニク女子高教師で英文学の補講にも熱心、好青年ショーン (Sean Doyle) と結婚して2子をもうけた (妹の) 三女ケイトラン (Caitlin) はまたも懐妊、父親トミー (Tommy) は相変わらず現代政治談義をわめきちらしている、と。修道院生活後、ロンドンへ飛び出してイギリス人ジョン (John) と同棲、ミサにも御無沙汰の不敬を母親からなじられたブリッドは、誰の干渉も受けない独立不羈の生き方を主張する。やがて、アーニェ帰宅。「アイルランド人が反ユダヤ主義でないのは、アイルランドにはユダヤ人がいないからだ」というジョイス (James Joyce) の言葉をアーニェが引くと、1904年にレデンプトール会修道士 (Redemptorist priest) の命令で、リメリックから少数ながらユダヤ人が追放・迫害された事実があること、イスラエル首相 (1983-84) シャミル (Itzak Shamir, 1915-) はマイケル・コリンズ (Michael Collins, 1890-1922) の^{ファン}信奉者で、イスラエル建国闘争はアイルランド共和主義に影響された、などとブリッドは応酬。帰宅した父親と挨拶を交わす (2場)。親子4人の夕食。楽しかったバンゴー (Bangor) 遠足の思い出を娘2人が話すと、そこはオレンジ・メンと救世軍 (Sally Army) の町だと父親は悪口。プロテスタント行進曲 'The Sash My Father Wore' を冗談で娘たちが歌うと烈火の如く怒り出すが、他の者は大笑い (2場A)。寝室でのブリッドとアーニェの会話。多民族のロンドンでもアイルランド人はよそ者扱いされ、他の少数民族以上に受け入れられていないし、一方アイルランド人は、錦を飾る場合を除き、故国を捨てた移民を許さない、自分が愛する、子ども時代のベルファーストはもはや存在しないが、偏狭な価値観を押しつけられず、自由な解放感がロンドンなら味わえる、とブリッド。そして20年前、姉妹でアイルランドをヒッチハイク旅行し、オランダ人学生と親密になった思い出を語る。英軍駐留が開始されたのはその翌年1969年だった (3場)。ケイトランが乳母車を押して登場。「アイルランドが生産するのは、赤ん坊と死体だけね」と、乳児2人の育児戦争に疲弊しながらも威勢よくシニカルな口調で喋りまくる (4場)。様々な回想場面が導入される——1965年、15歳のとき純潔教育を説く神父への告解、1966年の復活祭蜂起50周年記念行事、1969年の公民権闘争時代、1961-68年在籍の聖ドミニク女子校で、聖職を勧める尼僧に、共産主義者になると拒否したブリッド。1969年、英軍駐留。1968年、ダンス・ホール。ケイトランとブリッドは買い物後、喫茶店で休憩。「商売にならないから、カトリック教会は平和なんか望んでないわ」とケイトラン (5場)。新聞の死亡記事欄に義

父の盟友マッキラン(Francis McQuillan)の名前を見つけたノラは、夫に知らせるが、寝ぼけて話が噛み合わず、口喧嘩になる。ケイトランが来訪、姉2人と連れ立ってリパブリカンのクラブへ繰り出す(6場)。クラブの経営者('fear a ti' [sic])が、〈美人三姉妹〉をマイクで紹介、そのリクエストに応じて、ブリッドはアイルランド語の歌を披露。歌声を聞きつけたパット(Pat O'Brien)と20年ぶりに邂逅。彼はケッシュ刑務所での12年間の服役を終え、髪が薄くなっている。パットとブリッドがダンスすると、いつしか1968年の若い恋人時代に戻っている(7場)。二人はクラブの外の街路。ウルフ・トーンが反教会だったように、「アイルランドの最大の敵は、イギリス人じゃなくてカトリック教会」であり、「イギリス人は土地を占拠するかもしれないけど、ローマ教会は人々の心を占拠するのよ。兵士たちを土地から排除するほうが、脳味噌からお香を追い払うよりも簡単だわ」(169)、つまり「教会に急所を握られてるのよ」と興奮して激論を吐くうちに、焼けぼっくに火がついたブリッドはパットを誘惑する。その瞬間、不審な車が背後から急発進し、銃声が響く(8場)。救急車のサイレン。片腕を負傷したブリッドのためにパットが救急車を呼んだのだが、当局の取調べを避けるために、現場から姿を消す(9場)。病室でブリッドは半身を起こし座っている。付添いの若い婦警に、年齢(20歳)と就職動機(安定したキャリアだから)を訊く。代わって男性刑事が執拗に尋問し、中座。婦警はブリッドに、いまの刑事はカトリックよ、あなたはうわ言で、パトリックと呟いていた、と告げる(10場)。娘の襲撃者は〈撃ち殺し方針〉をとるアルスター警察だ、と決め付ける父親と、IRAの内ゲバ(internecine feud)の可能性も推測するブリッド。無闇に騒ぎ立てる父親に母娘はきつくあたる(11場)。寝室での会話。ジョンとパリ旅行したときの逸話。ジョンの祖父の従兄弟(ルーマニア系ユダヤ人)の家を訪ね、苦悩の半生を聞いた。ナチ時代はまる一年森林に隠れ、スターリン時代は投獄、まさに20世紀の迫害の生き証人の苦勞話に、欧州辺境のイギリスとアイルランドが敵対し憎みあっている現実が卑小に思え、「その二つのつまらない島が大西洋に沈んでしまうのを見たいのか、暖かく結びつけてヨーロッパの方へ引っ張って行ってあげたいのか、わからなかった」(181)とブリッド(12場)。「アイルランドの最大の輸出品はアイルランド人だ」と夫婦が話していると、裏口からこっそりパットが登場。内部抗争で彼が標的とされたのでは、と推測するブリッドの憂慮をパットは否定し、頬にキスして去る。「アイルランド史は、醒めようとしている悪夢なんかじゃない。寝ても覚めても我が身を焼き尽くす生き地獄なのよ」(13場)。ロンドンに帰る機内でブリッドは、両親や姉妹の別れ際の姿や言葉を思い起こし、感傷に耽る。うるさく話しかけるイギリス人乗客を睨み付け、たじろがせる。ヒーロー空港で見知らぬ男女がブリッドに近づき、テロ防止法違反容疑で彼女を逮捕する(14場)。

(3) 第3戯曲集『まったくのたわごと』

第3戯曲集に寄せたフィネガンの序文を以下に引用しよう。

『野草』は、母親の葬儀のために故国へ戻る男の物語である。『野草』では、その男はアイルランド人で、場所はアイルランドである。しかし『野草』は、エグザイルである我々すべてに関わる。もしかすると、20世紀の世界はかつてないほどにエグザイルに溢れているかもしれない。移住と移民状態は現代世界の多くに共通の肉体的かつ精神的状態である。それは、自分がなにものなのか、どこから来て、どこへ向かっているのかが、曖昧な領域 (twilight zone) であり、我々の日常の生活を悩ませる。2千年にわたってユダヤ人は離散状態で放浪した。今日では、我々はみんなユダヤ人のようだ。イスラエルやアイルランドのように、かつては存在しなかった故国が創設されてはいても、エグザイルと帰還の主題が、そうした国の文学をうねるように流れているのを見いだす。〈故国〉はどこにあるのか？——むかし父は私に向かって、お前はアイルランド海の真ん中に暮らしているみたいだ、行ったり来たり、のたうちまわり、いつまでも海上にいる、と言ったことがある。『野草』は、そうした〈海上にいる〉⁹⁾人々のためのものである。それはちょうど、〈故国〉から離れて生き続けようと努め、過去や〈懐かしい故郷〉や自分自身について、いつのまにか神話を編み上げている、『まったくのたわごと』の登場人物のように。誰しもエグザイルの現実には耐えきれないのかもしれない。『メアリー・マギン』のように、自国でエグザイルを経験し、よその場所での故国を約束する宗教への誓いを守ることで、それに打ち勝つ力を得る者もいる。しかし、『同志ブレナン』にはそのよその場所もない。彼が抱く、人類の理想の故国の夢は、20世紀末には粉々になっているように思われる。しかし、しかし、

「わたし、こう思うの——人間は信念がなくてはいけない、少なくとも信念を求めなければいけない、でないと生活が空虚になる、空っぽになる、とね。……こうして生きていながら、何を目あてに鶴が飛ぶのか、なんのために子供は生まれるのか、どうして星は空にあるのか——ということを知らないなんて。……なんのために生きるのか、それを知ること、——さもないと、何かもくだらない、根なし草になってしまうわ。」¹⁰⁾

マーシャ、アントン・チェーホフ『三人姉妹』

⑨『メアリー・マギン』(Mary Maginn) 2幕物(1幕15場、2幕17場の全32場)

主人公メアリーの73年間の生涯を辿りつつ、マギン家3代にわたる大河物語。アイルランド現代史の渦に巻き込まれながらも、淡々と進行する展開は、ちょうどクリスティナ・リード(Christina Reid, 1942-)の『チャイナ・カップの紅茶』(Tea in a China Cup, 1983)を思わせる雰囲気を感じている。

1913年5月21日、メアリー・ヴェロニカ・マギン(Mary Veronica Maginn)の誕生と洗礼(1場)。14年10月1日、父パトリック(Patrick)の葬儀(2場)。14歳のパット(Pat)を筆頭に、13歳のアレックス(Alex)、10歳のジョー(Joe)、8歳のシシー(Cissie)、6歳のジョン(John)、5か月のメアリーの6人もの子どもを抱え、母親メイ(May)は病院の掃除婦として働きに出ることを決意(3場)。パットとアレックスが、復活祭蜂起の指導者たち7人が〈ブリタニア〉によって処刑されるのを見る。ピアス(Patrick Pearse)、コノリー(James Connolly)、クラーク(Thomas J. Clarke)、マクディアモド(Sean McDiarmada)、マクダナ(Thomas MacDonagh)、キャウント(Eamonn Ceannt)、プランケット(Joseph Plunkett)の〈共和国宣言文〉全文引

用のあと、ライフル銃が発射され、全員倒れる。「ぼくたちがもう少し大きくてダブリンにいて、ピアスやコノリーと一緒にアイルランドのために闘っていたら、凄かっただろうな」と言うパットに、母は「貧乏人は政治にかまう暇はないし、政治家は貧乏人にかまわてられない」から、命を粗末にする〈死んだ愛国者〉になるな、と叱る(4場)。修道院の学校で、5歳のメアリーは退屈で柱時計をじっと眺めていて、シスター・ピーターから「1分1分、わたしたちは〈永遠〉に近づくのよ」と、注意される(5場)。19歳のアレックスが船でリヴァプールへ移住するのを、7歳のメアリーと母親が見送る。日曜ミサには必ず行くように言う(6場)。1921年、プロテスタントがカトリックの民家を襲撃。15歳のシシーと8歳のメアリーを連れてダウン州に避難を決意。息子たちは隣家のロルト夫人(Ella Rolt)に世話を託す。まだメアリーにはプロテスタントとカトリックの違いが飲み込めない(7場)。避難して空けた家にプロテスタント住民が居座り、一家の家具は通りで焼却される。新議会の創設とジョージ国王の演説(8場)。長男パットとネリー(Nellie Stewart)の結婚。ともに28歳(9場)。1932年5月25日、24歳の末っ子4男ジョンの最期を家族全員で見守る(10場)。家族会議。3男ジョーが妻アグネス(Agnes)との離婚意思と、別のプロテスタント女性ジーン(Jean Wilson)との同棲を告白。恥知らずと罵る妹シシーをジョーは殴る(11場)。チェンバレン首相の第2次大戦宣戦布告ラジオ放送。二男アレックスと妻ウィニフリッド(Winifrid)の息子バジル(Basil)からの手紙をメイが読む。バジルは名ボクサーで、イギリス空軍に入隊予定(12場)。ジョー、ジーン、メイが映画館でクラーク・ゲイブル主演の映画を観賞。「ナチス、ベルファーストを爆撃」と新聞売り。3人はベルファーストの通りの固有名詞を順に延々と朗誦する(13場)。1945年、チャーチルの終戦演説。商工会議所(Chamber of Commerce)の雇用主のドイツ系ユダヤ人ゴウルドブラット氏(Goldblatt)と祝杯をあげるメアリー。独立して自分の店を開くために兄パットに借金を依頼。シシーは夫ダニーと死別(14場)。1947年9月29日、母メイの葬儀。子どもたち5人の祈りの言葉(15場)。

2幕。メアリーとデイヴィ(Davey Joseph Tolan)の結婚式。メアリーはフランス人ジャン・ポール(Jean Paul)からも求愛されていたが、相思相愛ならデイヴィと結婚したほうがよい、と在英の兄アレックスは手紙で助言(1場)。1949年メアリーの分娩とボクシングの試合中継。デイヴィが懸命に応援する地元ボクサー、ケリーはチャンピオンにノック・アウト負け(2場)。長男ピーターの誕生で、新居探しのメアリーとデイヴィ。プロテスタント優勢地域でやや辺鄙だが、気に入った家を早速借りる(3場)。第2子(長女ヴェロニカ)分娩前のメアリー。煙草をふかす看護婦と酔った医者が担当だが、心安い雰囲気(4場)。1954-60年。育児と家事に忙殺されるメアリーを儀式的

に描く場面(5場)。近所の干渉もなく、思い出のつまった住み慣れた家を長男の学校(クリスチャン・ブラザーズ)の都合で引越すことにしたメアリー。職を転々とする(asking for his cards)が働き者の夫は家事には無頓着で、引越し作業もメアリーがひとりでこなす(6場)。1964年2月13日死去の3男ジョーと、同年8月5日死去のパットの妻ネリーの葬儀(7場)。1966年。メアリーとデイヴィ、16歳のピーター。66歳のパットがカトリック殺害の新聞記事を嘆く(8場)。1969年8月15日。暴動の勃発を報じるジャーナリスト。公民権活動で治安部隊に追われたピーターが深夜戻ってきて、妹に家の鍵を開けるよう頼むが、母親メアリーが戸口に現れ、息子を左翼化させるクリスチャン・ブラザーズに入れたのが失敗のもと、15歳の娘ヴェロニカまで染まっている、と嘆き悲しむ(9場)。オニール大尉が、カトリックに職と住居を与えれば、プロテスタントのような安定した暮らしに憧れ、18人の子沢山にならず、問題は解決すると主張。母の知り合いのコネでピーターはイギリスの大学に進学することになり、1幕6場のように、埠頭で母メアリーと妹ヴェロニカ(看護婦)が見送る(メアリーと亡霊の母メイが一瞬見つめ合う)(10場)。1973年、長男パットと二男アレックスの同時期の死去が、書簡朗読で告げられる。右足麻痺の障害でメアリー宅に同居していたパットは苦労人ゆえ気難しかったが、晩年を世話できてよかったとメアリー、心臓発作で急死した夫は、50年前に離れたベルファーストへ里帰りして可愛いメアリーに会いたがっていた、と、未亡人ウィニフリッド(11場)。1976年、メアリーとデイヴィに、近所のボイル夫人が、狙撃兵潜伏の可能性を口実に英軍が彼らの自宅に不法侵入した、と通報。メアリーとボイル夫人は家を封鎖する若いウェールズ人警備兵を説得して、亡霊メイとともに我が家に戻る(12場)。メアリーの娘ヴェロニカの婚礼の日。亡霊メイが美しい赤毛の孫娘を賞賛し、子どもが巣立つとき親は少し寿命が縮まるもの、とメアリーに声をかける(13場)。1981年、10人のハンスト闘争囚人のサッチャーによる「処刑」。10人の氏名(Bobby Sands, Francis Hughes, Raymond McCreech, Patsy O'Hara, Kevin Lynch, Martin Hurson, Thomas McIlwee, Kieran Doherty, Joe McDonnell, Mickey Devine)をピーターが読み上げ、各人が1幕4場のように〈共和国宣言文〉のさわりを朗読し、サッチャーの同一声明文「英国政府は囚人、代表者いずれとも、ハンスト終結の条件交渉は行わない」がかたくなに10回、繰り返される(14場)。1982年、シシーの死を看取るメアリー。6人兄弟の女2人のせいで対抗意識が強くて仲良くできなかったことを後悔しながらシシーは息をひきとる。シシーとメアリーのこの確執は、のちに見る『まったくのたわごと』のポール、フランクの葛藤にも近いものがある(15場)。1984年8月27日、娘ヴェロニカと婿エメットの長女、つまりメアリーの初孫(Fionnuala McSwiney)の誕生と洗礼(16場)。1986年、メアリーとデイヴィが就寝。翌朝先に起きたデイヴィは

メアリーが事切れているのに愕然とする (17場)。

⑩『野草』(Wild Grass)

1986年11月19日、ロンドンのパトリック (Patrick Jmaes Brady) の留守番電話に妹メアリー (Mary) から、父ジョー (Joe) に至急連絡せよ、との伝言。父から母親エレン (Ellen) の死去を知らされた彼は、地下鉄で空港に向かう。二人の祖父の名前を命名した出生時の回想。聖パトリック教会でのパトリック祝祭日の内的独白。1949年3月に彼を帝王切開 (breach birth) の難産で生んだ母親の思い出話、とくに最初に暮らした新婚当初の家を懐かしむ。機内着陸放送。父や妹、母の友人ボビー (Bobby) とフィロミナ (Philomena)、叔父のビリー (Billy——約束にルーズで母親は嫌っていた) と叔母マギー (Maggie) に会い、母の亡骸と対面し、「この女性の子宮から僕は生まれた」と感慨を漏らす。父親は土建職人で実入りは少なかったが、幸せな暮らしだったと語るエレンの回想：雨で作業中止で早く帰宅した夫と過ごす団欒、乳母車でまどろむ赤ん坊メアリー、学校のない月曜にサッカーで遊び、洗濯で皺だらけの自分の掌を珍しそうに眺める息子…。遊び友達デレック (Derek Smith) の母親がなぜ自分と彼が遊ぶと嫌がるのか、なぜ英国旗を我が家は掲げないのか、幼な心に不思議がるものの、1950年代には市の北方にあるホワイトアビー (Whiteabbey) 地区は新旧両派住民が混在して平和に住んでおり、兄妹はオレンジ会の行進も楽しんで見物したし、プロテスタントの級友とのクリケット競技、6歳年上のカトリックの少女ウナ (Una) との失恋、キャリックファーガスでの朗読コンテスト・10歳未満の部では、「我が家」(My Hut) と題する自作の詩を朗読し、84点で見事優勝。その後、クリスチャン・ブラザーズ校に入学し、すっかり愛国少年になった彼は、国歌‘Soldier’s Song’の流れる国技ハーリングのラジオ中継を大音量で流し、エレンは閉口したものだっただ…。葬儀の手配を進めるパトリックとメアリー。棺の傍らで死の意味について瞑想するパトリック。叔母ベラ (Bella) も到着。再び、回想場面：紛争の勃発とともに、政治論議で家族の口論が絶えない。パトリックは怠学し、昼間寝て夕方起き出す不規則な生活。1970年のある夕食光景。病身の叔父ジェリー (Gerry) も家族の一員。母親の共和主義非難の言葉にメアリーが口答えして平手打ちを食い、出て行く。メアリーもこの当時はアジ新聞を売り、政治集会に顔を出すなど政治活動に夢中。若い世代に理解を示す父ジョーと違って、母親は政治論争に嫌悪を隠さない。司祭のロザリオの祈りに手を抜くパトリック、母親の叱声。棺が閉ざされ、11月夜の出棺光景。再び、70年代の夕食時の回想：母親とパトリックが激しく対立して (at loggerheads)、議論の応酬。神の掟に従って生きる大切さを説く母に、「ドネゴールからコークまでの全ての電柱に司祭を吊

さない限り、アイルランドは変革も進歩もしない」(『兵士たち』16場のキアランの台詞と同じ)し、司祭の受売りばかりで、自分の頭で考えていない、新旧両派の労働者の大同団結を主張し、アイルランド語を教えるのも、究極的には自己発見のためだ、と息子は反論。それなら「狙撃兵」を擁護するのはなぜか、と父が割り込み、物理的にも精神的にも混沌を生み出し、「面倒をおこす」(shit-stirrer)のが彼らの取柄だと答えるパトリックに、殺るならもっと大物を狙え、と父は極論。長男だからと甘やかして育て方を誤った、と嘆く母親。叔父のジェリーが、英軍による夜間外出禁止令(curfew)発令のニュースを伝える。別の回想場面に移行し、8歳のパトリックは〈聖体拝領〉(Holy Communion)の儀式を、知らずに2回も受けて母親に叱られる。10歳の時には司祭になりたいと言ってセアラ叔母さんを喜ばせるが、修道会の学校でゲーリック・フットボールをしたいのが本心だった。それでもエレンは、無学の辛さをなめ「教育は無駄にはならない」と聞かされた母親の言葉を信じて、神父と面接し、自宅を引越してまでパトリックをクリスチャン・ブラザーズイレブン・プラスに入学させ、彼も十一歳試験を優等で合格する。エレンが自分の花嫁衣装を、パトリックの妻となるマリリン(Marilyn)——カトリックでも地元出身者でもない——に贈る。パトリックは葬儀で、形而上詩人ダン(John Donne)の「死よ驕るなかれ」を朗読。再び母の回想：グラマー・スクールに進学後、成績不振で政治的に左翼化した息子だが、知人の息子の推挙でイギリスの教員養成大学に進学、やきもき(on tenterhooks)させられた3年後、無事に資格を取得して卒業し、ロンドン上京。穴蔵の下宿生活を経てすこし落ち着いたのも束の間、今度はその教職を辞めて、北アイルランドに関する本を執筆したいと、パトリックは打ち明ける。そんな本は腐るほどあるのにちっとも苦境は変わらない(still in the pickle)、と高飛車に決めつける(laying down the law)母親相手に、昔と同じように口論になるが、ともにかかなりの年齢を重ねたいま、紛争初期の母子の絆でもあった、あの壮絶な議論を懐かしんでいる印象もあった。棺が埋葬され、出産妊婦の悲鳴がこだまし、幕。

⑪『まったくのたわごと』(It's All Blarney) 2幕全11場(各6, 5場)

北部ロンドンのオ布莱エン家。空港にポール(Paul)、モリーン(Maureen)夫妻を出迎えたフランク(Frank)、シーラ(Sheila)たちが帰宅。昨今の空港警備の厳重さや、ロンドンのアジア系移民の増加を話題にお喋りするが、ややぎくしゃくしている。ポール/フランク兄弟は、かつてともにクリスチャン・ブラザーズの学校に通ったが、兄は成績優秀、弟は学校教育に馴染めなかった。それでもフランクは最近になってマルクス主義史観の北アイルランド史を読むなど学問にめざめ、あらたに教職に

就いている。妻はアイリッシュ・ダンスの教師で、全国大会や世界大会優勝の数多くのトロフィーを獲得(1幕1場)。食事準備の弟夫妻の、兄夫婦の品定め。ポールは70歳近いのに元気潑刺、昔同様に自信家、モリーもやや肉がついたが50歳とは思えぬ魅力。北アイルランド・キャヴァン(Cavan)州時代、兄弟には姉アイリーン(Eileen)がいて、深く思慕を寄せていたフランクは、姉がイギリスのコヴェントリー(Coventry)の寄宿学校に出立する日、悲しくて家を夢中で飛び出し、深夜に帰宅して母からは叱られ、兄ポールからは高笑いされた思い出を語る。二階の寝室では、夫の無礼な態度をモリーがたしなめる。昔、近所の少女(Mary Nolan)に小銭をやってお尻を覗いた弟を、〈聖心〉画のキリストが睨んでいるぞ、と怖がらせた思い出を話し、上がってきたフランクにまだ Mary Nolan を覚えているか、と尋ねるフランク(2場)。2組の夫婦に、フランクの娘メアリー(Mary)と息子ファーガス(Fergus)を交えての夕食。フランクは、苦手な教育心理学や教育哲学も履修し、現在はカトリック系総合^{コンプリヘンシブ}中等学校で工芸・木工・製図などの技術科目を教え始めた。やはり教師のメアリーに、教職は休日が多く女には良い仕事、とポール。食後、女友達との約束でメアリーは急いで外出。ポールは「基金調達委員会委員」で、現地での運用実態調査の名目で、兄弟夫婦揃ってのアイルランド旅行計画を立案していたのだった。昨秋の基金調達パーティは、パット・ブラーニー(Pat Blarney)アイルランド下院議員(T.D.)を講師に招き、参加者500人の盛大なものだった。ポールが音頭をとって4人でアイリッシュ・ダンスの夕べ(3場)。翌朝シーラが一番に起きて台所で『アイリッシュ・ポスト』紙を読む。アイルランドの不動産物件広告を目当てにフランクが購読している新聞で、故国での隠遁生活はエグザイルの夢だと、モリーに説明。ポールが次に現れ、やっぱりフランクはいつでもビリか、と嫌味。新聞の熟年向け恋人募集の個人広告欄を面白がって読み上げていると、メアリーがとても女性的でセクシーな服で現れ、慌てるポール。そこへフランクが、テレビでいいサッカーの試合がある、と呑気に登場(4場)。サッカー観戦をしながらポールの独白。スポーツマンのフランクは、ハーリングの試合の土壇場で決勝ゴールを決め、見事に急場を救って(saved the day)〈クープリン〉のような英雄扱いを受けたが、嫉妬したポールが、フランク(学校での呼び名はプロインサス)は(イギリスのゲームであるため)競技禁止種目のサッカーをした、と暴露して水をさしたことがあった。アイルランド人とスコットランド人(the Jocks)がイギリス・サッカー・リーグの屋台骨と、「マンチェスター・ユナイテッド」を応援するフランクに、「スパーズ」(Tottenham Hotspur; Spurs)のリネカー(Gary Lineker, 1960-)が先制点。フランクは、兄の悪意の密告のあと、試合出場選手名簿から永久に除外されたことを思い出す。フランクは副校長昇進見込み、と妻から聞いても、いつ

も二番手の奴だ、と腐すポール（5場）。ロンドンのアイリッシュ・ダンス・ホールで楽しむ2組の夫婦。ケリー神父（Fr Desmond Kerry）の歌、シーラの踊りのあと、家の鍵が見つからずたむろする暗い玄関先で、フランクが酔って、かつて交通事故を起こしそうになった黒人女性への差別的な発言。照明がつき、家の中。メアリーがグラスのワインをポールにひっかける（6場）。2幕は北アイルランドの検問所から始まる。2組の夫婦、ファーガスと知人のジョー（Joe Lynch）に、英軍と警察による車両検査と職務質問がしばらく続き、やっと通行許可が下りる（1場）。寒い山小屋に到着。政治犯として5年間クラムリン・ロード刑務所に服役したと噂のジョーはいったん帰り、酒（cratur）をみんなで飲み交わし、ポールが歌う（2場）。「女ならあのでっかい若者に抱かれるのも悪くないわね（A woman could do worse than lie under a big strapping lad like that.）」と口を滑らせた妻の台詞で、ジョーに嫉妬するポール。観光地化しているけれど、のんびり南の共和国へ旅したほうが良かったのでは、と案じるシーラ（3場）。翌朝。なぜポールと不仲なのかを、ファーガスに教えるフランク。姉が修道院に入ったあと、本来家業の農業を継ぐべき長男ポールは親の扶養の重荷（onus）を嫌ってさっさと渡米。3年後、辛い思いで渡英の決意を継げたフランクは母親から罵られ、勘当同然の家出をし、死に目にも会えなかった。シーラはモリーンに、時代は変わり、子どもの世代は親の価値観や文化に束縛される必要のないこと、もう自分たちエグザイルは本当の意味ではアイリッシュではないことをしみじみと語る。ファーガスが出発準備を伝える（4場）。ナショナリストのパブ。ジョーの悲惨な経歴を知り、武器購入の資金援助も辞さない、などと大口をたたくポールに、とうとうフランクが堪忍袋の緒を切り、切々と訴える。自分も含めて、我々は故国を捨て、もはやこの土地で暮らしている当事者でもないのに、例えば「ノーレイド」（Noraid: Northern Ireland aid）を組織してあれこれ政治に注文をつけ、実体や中身（guts）のない、たわごとだらけの（full of blarney）大言壮語に酔いしれる未成熟なエグザイルであり、愛国心を若者たち（ファーガスやジョー）に伝染病のように吹きこんでいるだけで、〈まったくのたわごと〉ではないのか、と（5場）。——外野にいる者がいっそう試合に熱中する現象は、フランクが批判するほどには、悪いこととは思わないが——なぜならもしフランクの主張を受け入れるなら、北アイルランド問題を論じられるのは北アイルランドの人々だけ、ということになる——兄の悪意に対する積もり積もった鬱憤晴らしが彼の発言の根底にあることはよく理解できるし、北アイルランド問題局外者という自覚を伴う逡巡は、たしかに傾聴に値する重みがある。

⑫『同志ブレナン』(Comrade Brennan)

1993年、スコットランド、グラスゴウのブレナン家。同居している孫息子マイケル(Michael)は、大学を1年休学して恋人のいるポーランド行きを計画、祖父ジョー(Joe)や祖母モイラ(Moira)に打ち明ける。場面代わって、ジョーが、アイルランドのコークにいる娘メアリー(Mary)、ニュー・ヨーク在住の息子デイヴィッド(David)に電話し、彼らの母親(自分の妻)モイラの死去を伝える(1場)。花嫁衣装のモイラ、披露宴の回想。両手を伸ばしたまま後退りして去るモイラ。留守中の子どもの世話を夫に頼んで搭乗するメアリー、妻クリス(Chris)を残し出立するデイヴィッド。彼の脳裏をよぎるのは、アメリカ移住を切り出した時に、アメリカを悪の権化とみなす父親から殴られた思い出。一方、ブレナン家では、隣人で同志のアレックス(Alex Robinson)と孫マイケルにジョーが妻の往生の模様を語る——早朝目覚めた時は寝息を立てていたが、朝食を準備してベッドに戻ってみると、妻が咯血して事切れていたという。1945年戦勝記念日(VE Day: 5月8日)の回想: 帰還した英兵ジョーに、ホテル客室係のモイラが積極的に声をかけ、ダンスを踊る。まもなく結婚、その頃勤めた土建会社のひどい現場監督(Clerk of Works)のせいで、同僚アレックスとともにジョーは労働組合運動にのめり込んだのだった。メアリーが到着。娘に命名したころの回想。メアリーは棺に納められた母に面会。教会での挙式を父親に反対され(against the grain)て嘆き悲しむメアリーを慰撫する母親の思い出が蘇る。(共産主義者の父親は1936年のスペイン市民戦争時代にカトリック教会から拷問を受けた。)死後に司祭は呼んだのかと尋ねるメアリーに、偽善的墮落者(reprobates)の世話にはならん、とジョーは怒りだすものの、さすがに蠟燭を点すことだけは(蜜蠟は〈働き〉蜂が拵えたものだから)許す。次いでデイヴィッド到着。離婚したこの父親とマイケルは6年ぶりに再会するが、早々にアレックス宅へ宿泊に行く。場面転換し、そのアレックスとモイラが抱擁し、やがてジョーが帰宅。妻の不倫をうすうす察知した彼は、婉曲かつ威圧的にアレックスとやり合う。デイヴィッドも母の死顔と対面。愛情の冷めた最初の妻アイリーン(Eileen)との離婚意思を表明したとき、両親から反対され、父親に激しく抵抗した記憶が蘇る——「共産主義の信念は挫折し、愛着もないくせに、いまだにその思想や理想を信じつつづけている」と。デイヴィッドメアリーの会話。機内にいた80歳近い老婆の幸福な姿に、自分の母親の身代わりにその老婆こそ死ねばいい、と邪悪な願望を抱いたことを語るメアリー。枕元のジョーに、寝間着姿のモイラが現れ誘惑する幻想。孤独な父親の今後を案じて、デイヴィッドとメアリーはそれぞれが自分の家に引き取ると提案。1936年のアイルランド: 18歳のジョーがスペインで参戦と聞き、青シャツ隊入隊と誤解していたマグアイア親父は、反ファシスト側につくと知って怒る。ジョーは、

神など「糞食らえ (stuff it)」と捨て台詞を吐き、司祭を殴り返す。寝つかれぬマイケルが深夜3時に祖父の様子を見に戻る。コーヒーをいれるマイケルと元・父親のぎこちない会話。再び回想：アメリカの投資会社からチェコのプラハへ顧問役として派遣され、商談相手から自分の父親の職業を訊かれて、返事に窮するデイヴィッド。ピケを指揮監督し、スト破り (Blacklegs) の連中と揉み合いになったジョーは負傷、おまけに脅迫騒乱罪で警官に連行される。——朝が訪れ、妻の生前の遺言通り、ジョーは (共産主義を表す) 赤ネクタイを着用。マイケルもジョーに手伝って貰って赤ネクタイを締める。ジョーは体調が悪く、一、二度ふらつく。葬儀人が到着し、メアリーがロザリオを手に兄とともに^{ヘイルメアリー}天使祝詞を唱えるが、ジョーをはじめ他の者は唱和しない。4人の男で棺を担ぎ、退場。墓地での埋葬の場面、モイラの亡霊が彷徨し、ジョーはまたよろめく。帰宅後、社会主義の信念を貫いたブレナン家は尊敬されている、と胡麻をするアレックスをデイヴィッドは軽蔑。休息したジョーが現れ、心中を見透かされたアレックスは退散、ジョーは孫のマイケルに、血筋は争えないと、ポーランド行きを勧める。メアリーはどうしても父親を生まれ故郷のアイルランドに連れ戻したい、と懇願。ソビエト議会でのゴルバチョフ (Gorbachev, 1931-) 大統領 (1990-91) による、共産党のマルクス・レーニン主義イデオロギー放棄宣言演説。〈インターナショナル〉が流れるなか、ジョーとモイラが踊り続け、幕。アイルランドを離れたエグザイルたちが肉親の葬儀という悲劇的な機会に里帰りし、自分の生き方を見つめ直す主題は『野草』と共通している。

3 おわりに

11作品の概観を終えて、フィネガンの演劇のモチーフである、反カトリック教会、共産主義への傾倒、ユダヤ人への深い共感などの特色が明らかになったが、おそらくフィネガン自身の経歴が作品に色濃く反映されていることは間違いないと思われる。伝記資料の不足のせいでこの点は検証不能であるが、今後とも機会があれば、割愛した『ジェイムズ・ジョイスとユダヤ人』も含めて、この本邦初のフィネガン紹介に補説を加えていきたいと考えている。

注

- 1) Robert Welch (ed.), *The Oxford Companion to Irish Literature* (1996), Schrank & Demastes (eds.), *Irish Playwrights, 1880-1995* (1997), さらに D.L.Kieckpatrick (ed.), *Contemporary Dramatists 4th edition* (Chicago & London: St. James Press, 1988) にも記載がない。ただし, Robert Hogan (ed.),

Dictionary of Irish Literature (1996) には単に「劇作家」とだけ記述があり、本稿で扱った4戯曲集が列挙されている。

- 2) 各劇場の座席数は、Barry Turner & Mary Fulton, *The Playgoer's Companion* (London: Virgin Books, 1983) によるもので、1983年3月時点の収容能力。
- 3) 『マルドゥーン詩選集：1968～1983』(国文社, 1996年), p.251.
- 4) プランケットは1920年の列福後、1975年10月12日に聖者の列に加えられた。アイルランド人としては St. Lawrence O'Toole 以来、実に700年ぶり。彼はドロヘダでイエズス会の神学校を創設し、オウツ(Titus Oates, 1649-1705) が捏造した、架空の Charles 2 世暗殺計画である〈カトリック陰謀事件〉(the Popish Plot, 1768) に連座したかどで、ロンドンで絞首刑のうえ引回し、四つ裂き刑に処せられた。首は、ドロヘダの St. Peter's Church に安置されているという。
- 5) William Conor (1884-1968) は従軍画家として第1次大戦参戦、長年にわたり子どもや労働者を描いた。St. John Ervine (1883-1971) は劇作家・小説家。
- 6) Gen. Eoin O'Duffy (1892-1944) は、1917年 IRA に入り、独立戦争で活躍、懲役刑も受ける。デ・ヴァレラに警視総監職を解任されたあと、Army Comrades' Association の指導者となり、the National Guard と改称して、制服に青シャツ、ファシスト式敬礼を取り入れて〈青シャツ隊〉の指導者となる。1933年には統一アイルランド党 (Fine Gael) 党首に選出されるも、1934年9月に突如、辞任。35年6月には the National Corporate Party を結成。36年7月のスペイン市民戦争勃発後、フランコ政権支援のためにアイルランド旅団を組織。中立政策をとる政府は参戦を非合法とする法案を通過させたが、翌年にかけて約700人のアイルランド義勇兵がスペインへ渡り、過酷な状況のなか半年耐えたという。オダフィーはこの派兵を反共産主義十字軍とみなした。国葬を受けている。(Henry Boylan, *A Dictionary of Irish Biography*, 3rd ed. (Dublin: Gill & Macmillan, 1998), pp.321-2.
- 7) 詩集『ある自然児の死』(1966年) 所収の最後の詩「僕だけのヘリコーン」('Personal Helicon') の最終行にある、(僕が詩を作るのは)「自分を見るため闇をこだまさせるため」より。『シェイマス・ヒーニー全詩集1966～1991』(国文社, 1995年), p.62.
- 8) 周知のように、ラシュディは1988年に発表した『悪魔の詩』(*The Satanic Verses*) が、イスラムを冒瀆するとして、コメイニ師 (Khomeini) から〈^{ファトワ}裁断〉(fatwa) として死刑宣告を受けた。しかし、その後も彼の執筆意欲は衰えず、6作目の小説『彼女の足元の地面』(*The Ground Beneath Her Feet*) が最近、刊行された。(Time, May 24, 1999, p.51.)
- 9) 'at sea' には、航海に出て陸地の見えない海上にいる、という物理的状況と、比喩的に「途方に暮れている」「間違っ・はずれている」の意味がある。
- 10) 神西清訳『桜の園・三人姉妹』, 新潮文庫, 1967/87, p.152. 第2幕の台詞。この最後の台詞 'everything's just wild grass' が芝居の標題にとられているのだが、別の英訳では 'the whole thing's... means less than nothing.' [(Anton Chekhov, *Five Plays* (Oxford UP, 1980/91), p.198.) となっている。ロシア語原典の原義に今後あたりたい。

使用したテキスト

Seamus Finnegan, *North: Four Plays* (London: Marion Boyars Publishers, 1987)

-----, *The Cemetery of Europe* (London: Marion Boyars Publishers, 1991)

-----, *It's All Blarney: Four Plays* (Chur, Switzerland: Harwood Academic Publishers, 1995)

-----, *James Joyce and the Israelites and Dialogues in Exile* (Chur, Switzerland: Harwood Academic Publishers, 1995)